恋愛に関する心理学研究の展望
― 異性交際から疎外された若者へのライフコースからのアプローチ ―

Young People who Alienated from Romantic Relationships:
Review of Psychological Approach from Life Course Perspective

若尾 良徳

1．なぜ今恋愛研究なのか？

若者にとって恋愛や異性交際は大きな関心事であり，若者を理解するためには異性交際に関する問題を抜きには考えられない。とりわけ，近年，若者の異性交際行動や異性交際に対する意識は，急激に変化している。その変化は大きく 2 つに分けられ，1990 年代半ばから 2000 年代半ばにかけて 10 代の若者に生じた異性交際の急激な早期化・活発化とその後の沈静化，および 1990 年代以降に 20 代，30 代の若者において一貫して進行している異性交際の遅延化・未経験化である。本稿では，後者の異性交際が遅延化・未経験化した若者，つまり恋愛，性行動，結婚などの異性交際をしない，またはできない若者を取りあげ，これらの若者を「異性交際から疎外された若者」と呼ぶ。10 代の異性交際の早期化・活発化は，社会問題として注目され，多くの研究が行われてきたが，20 代，30 代の異性交際の遅延化・未経験化については，未婚化・晩婚化の問題以外はほとんどとりあげられてこなかった。とりわけ心理学においては，現代の若者の異性交際状況に関する研究自体が少なく，異性交際から疎外された若者に関する研究はほとんどみられない。異性から疎外された若者に関して様々な問題が指摘されており，研究の俎上にのせていく必要がある。

本稿では，異性交際から疎外された若者について，現状や背景を概観し，ライフコースの観点からの研究の可能性を提示することを目的とする。はじめに，現代の若者の異性交際の変遷として，1980 年代後半から現在までの若者の異性交際行動やその価値づけがどのように変化してきたのかを概観する。つぎに，異性交際から疎外された若者が増加し，注目される中で，様々な問題が指摘されていることをみていく。そして，異性交際から疎外された若者に関する心理学研究として，異性交際から疎外された若者の特徴，偏見や問題視，精神的健康，標準的な異性交際経験の規範の研究をレビューする。最後に，異性交際から疎外された若者に関する研究の新たな方向性として，発達的な視点，ライフコースの視点から研究することの必要性について議論する。

2．現代の若者の異性交際

(1) 若者の異性交際経験の急速な変化

若者の異性交際状況は，ここ 20 年ほどの間に急激に変化している。はじめに，若者の異性交際の現状を概観する。

高校生や大学生の異性交際行動は，1990 年代に急速に早期化・活発化している。たとえば，日本性教育協会の調査では，高校生のキスの経験率は，1970 年代から 1990 年代前半までは 20%台で推移していたが，1990 年代後半には 40%を超え，2005 年には 50%にまで上昇したことが示されている（Figure 1）（日本性教育協会，2012）。高校生の性交経験率も同様に，1980 年代後半までは 10%程度であったのが，1990 年代に上昇し，2005 年には男子で 26.6 %，女子で 30 %まで高まっている（Figure 2）（日

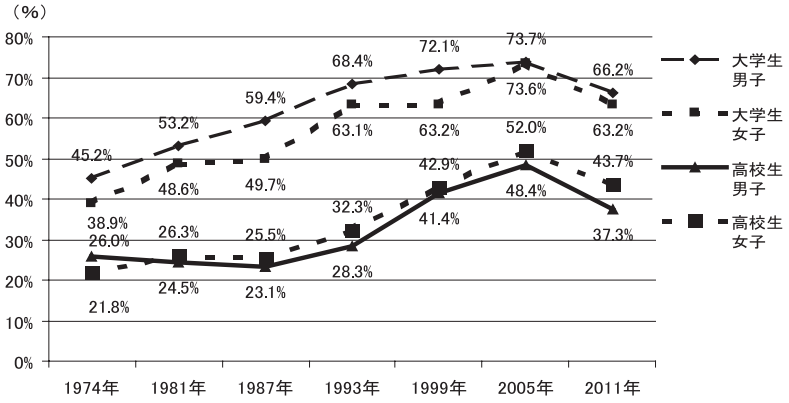

Figure1 高校生・大学生のキス経験率の推移（日本性教育協会，2012）

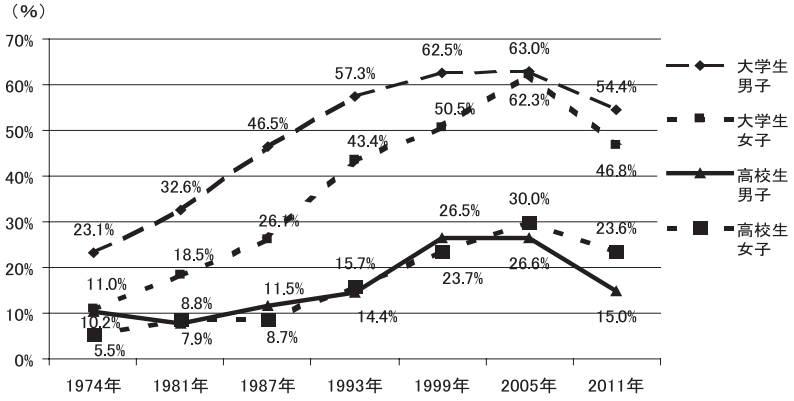

Figure2 高校生・大学生の性交経験率の推移（日本性教育協会，2012）

本性教育協会，2012)。東京都幼・小・中・高・心性教育研究会の調査においても同様の変化が示されており，東京都の高校 3 年生の性交経験率は，1990 年代後半から2000年代前半にかけて，急激に増加し，女子において 45％にまで高まっている（東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会，2005)。大学生の異性交際経験率については，高校生よりも早く 1980 年代に増加し始め，1990 年代後半から 2000 年代にかけて高い割合になっている（日本性教育協会，2012)。また，異性交際の経験人数については，1990 年代以降に活発化しており，性交経験がある者のうち複数の相手と経験がある高校生や大学生の割合は，1990 年代前半に比べて，1990 年代後半や2000年代には増加している（Figure 3）（日本性教育協会，2012)。つまり，若者の異性交際経験は，1990 年代から 2000 年代半ば頃に急速に早期化・活発化したのである。ところが，2000 年代後半以降になると，早期化・活発化傾向は終息し，経験率，経験人数ともに低下し，1990 年代の前半の水準になっている。すなわち，高校生や大学生の異性交際は，1990 年代半ばから 2000 年代半ばに急速な早期化・活発化が生じたが，2000 年代後半以降は遅延化・不活発化傾向にあるといえる。

一方で，20 代や 30 代の若者の異性交際行動には，一貫して遅延化・未経験化の傾向が見られる。2010 年に内閣府が未婚者を対象に行った調査によると，30 代未婚男性のおよそ 28％（都市 24.9%，地方 31.2%の平均)，女性のおよそ 15％（都市 12.6%，地方 18.0%の平均）が恋人として交際した経験がなかった（内閣府，2011)。2010 年の 30 代の未婚率は，男性でおよそ 40％，女性でおよそ 30％であることから，30 代男性の 10％程度，30 代女性の 5%程度が異性と恋人として異性と交際した経験がないことが推測される。また，国立社会保障・人口問題研究所（2012）によると，異性との交際がない者（配偶者，婚約者，恋人，異性の友人のいずれもいない者）が，10 代

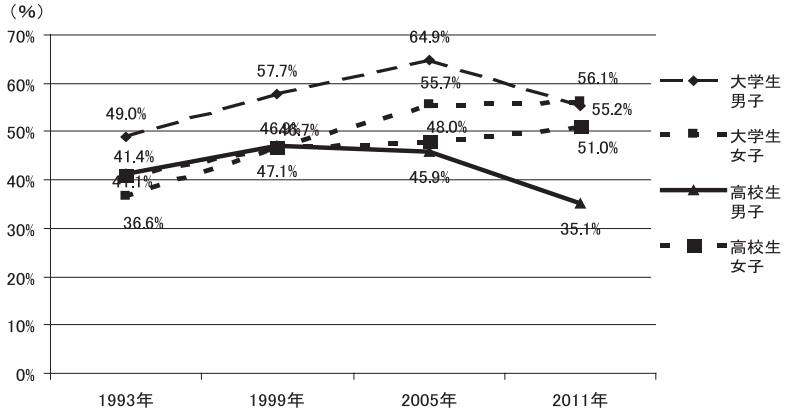

Figure3 高校生・大学生の性交経験者のうち複数の相手と経験のある者の割合の推移　（日本性教育協会，2012）

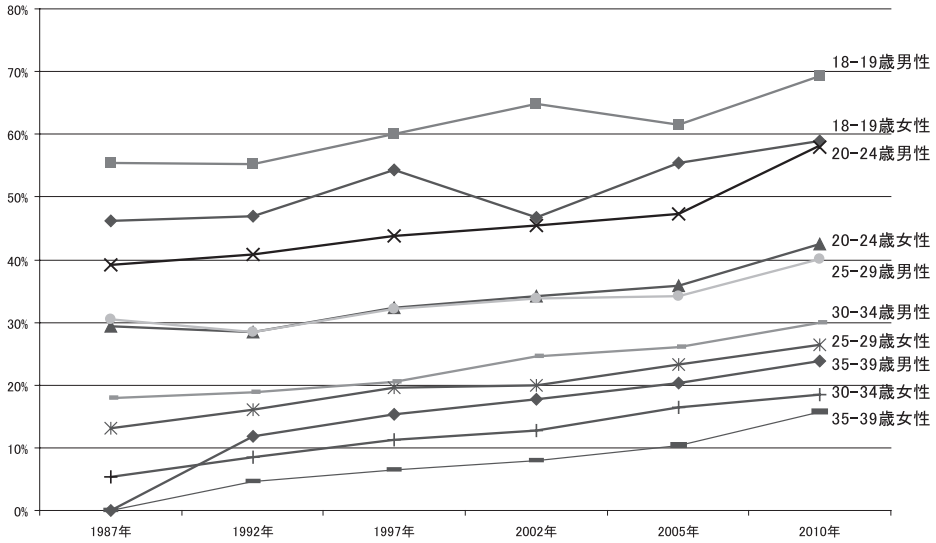

Figure4 年齢，男女別の異性との交際をしていない者の割合の推移
（国立社会保障・人口問題研究所，2012）

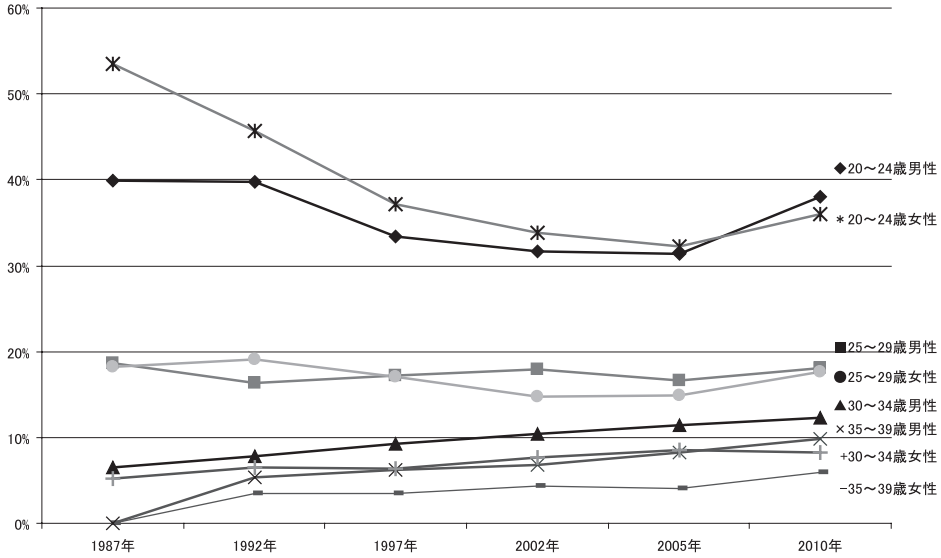

Figure5 年齢，男女別の性交未経験率の推移
（国立社会保障・人口問題研究所（2012），国勢調査（2010）を基に筆者が作成）

後半から30代後半の男女いずれにおいても増加している（Figure 4）。同様に，30代の性交未経験者も増加しており，30代前半の性交未経験者は，1990年代前半には男性で7.8%，女性で6.5%であったのが，2010年には男性12.3%，女性8.2%と増加している（Figure5）。

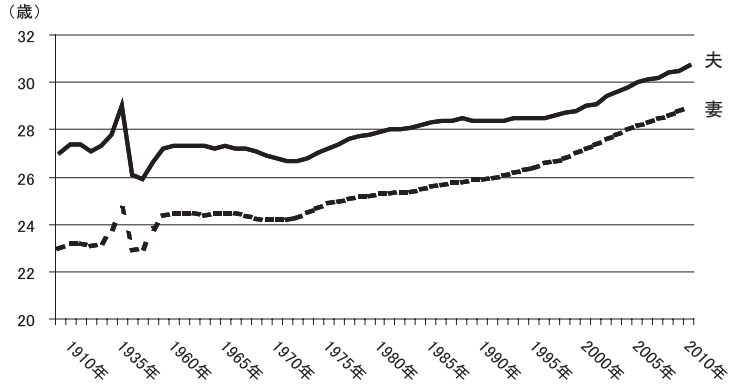

Figure6 平均初婚年齢の推移（国立社会保障・人口問題研究所，2013）

さらに，異性交際の一つの到達点と考えられる結婚[注]についても，遅延化・未経験化（晩婚化，未婚化）が進んでいる。平均初婚年齢は，一貫して上昇しており，1980 年代には，男性で 28 歳，女性で 25 歳程度であったのが，2011 年には男性で 30.7 歳，女性で 29.0 歳となっている（Figure 6）。各年齢段階の未婚率をみると，1990 年代にはいって，特に 30 代の未婚率が急上昇している。生涯未婚率についても，1990 年代以降に急上昇し，2010 年には男性 20%，女性 10%まで高まっている（国立社会保障・人口問題研究所，2013）。

以上から，若者の異性交際状況は，1990 年代半ばから 2000 年代半ばに主に 10 代において早期化，活発化したが，2000 年代後半以降は遅延化・未経験化の傾向にある。また，20 代，30 代においては，一貫して遅延化・未経験化が進んでいる。すなわち，2000 年代後半以降の若者の異性交際は，いずれの年代においても，異性交際を経験する年齢が遅い者や，そもそも異性交際の経験をしない者が増加しているという状況が生じているのである。

(2) 恋愛の価値の変遷

異性交際状況の変化に対応するかたちで，恋愛に対する価値づけも変化してきている。明治，大正期には，一般に恋愛は価値が低いものとされることが多かった。しかし，恋愛の価値は，戦後一貫して上昇しており，特に高度経済成長期以降に急速に高まってきており，現在では「恋愛せざるもの，人にあらず」といった，ある種苛烈な状況を生じさせてすらいると言われる（赤川，2002）。恋愛への価値づけの高さを示すものとして，小谷野（1999）は，「『みんな恋愛するのが人間として当然のことであり，それをしたことがなければ人生の楽しみや味わいの大半を失うことになる』と

いう暗黙の圧力がある」と述べている。

実際に，現代の若者が恋愛に強い関心をもっていることが示されている。たとえば，谷本（2008）は，「彼氏いないのなら何をしに大学にきてるって感じ」という女子大学生の発言を紹介し，若者にとって恋愛が最も大きな関心事の一つになっていると述べている。また，少数サンプルのインターネット調査ではあるが，2005 年の新成人を対象とした欲しいもの・叶えたいことの調査では，「恋人が欲しい」という者が 31.3%（複数回答）と最も高い割合であった（ORICON STYLE, 2006）。

また，若者を対象としたメディアにおいても恋愛が主要なテーマとなっている。例えば，谷本（1998）は，1992 年から 1994 年に出版された若者向け雑誌 69 冊のうち，845 頁が恋愛記事であったことを示している。単純に平均すれば，恋愛に関する記事が 1 誌につき 10 頁以上記載されていることになる。また，雲野（1996）によると，1995 年に発行された月刊少女漫画雑誌において，平均すると 66.9％が恋愛に関わる内容を含んでいた。さらに，立脇（2010）は，1968 年から 2003 年の間に「オリコン」の売り上げ年間ランキングにおいて 10 位以内にランキングされた 360 曲の歌詞を分析している。その結果，82％が恋愛をテーマとした曲であった。すなわち，現代社会では，若者は恋愛に強い関心を持ち，メディアにおいても恋愛は主要なテーマとなっているように，恋愛に高い価値づけがなされているのである。

その一方で，近年，恋愛への高い価値づけを問題視する言説，いわゆる恋愛不要論が一部で出現している。小谷野（2000）は，恋愛は誰にでもできる，誰もが恋愛をしなければならないという恋愛への価値づけに対して批判をしている。本田（2005）は，現代社会には「常に恋愛していなければならない」「いつもセックスしていなければならない」という強迫観念があると述べて，現実の恋愛からの撤退を肯定的に捉えている。また，異性交際をしない若者が注目されるようになり，恋愛に積極的でない男性を指す「草食系男子」（森岡，2008）や，恋愛を放棄している女性を指す「干物女」（2007 年ユーキャン新語・流行語大賞ノミネート），異性との交際を諦め，恋愛に興味を無くした者を指す「恋愛ニート」（TBS 系列テレビドラマ「恋愛ニート～忘れた恋のはじめ方」）といった言葉が作られ，話題となっている。すなわち，恋愛の価値が相対化され，異性交際をしない若者が注目されるようになってきたのである。

3．異性交際から疎外された若者の問題

(1)「若者の異性交際」への研究の視点

若者の異性交際のあり方が急速に変化する現状に対して，これまでの研究のほとんどは早期に活発に異性交際をする若者の問題に焦点があたっていた。そこでは，性的な逸脱や問題行動として，早期化・活発化の問題を扱っている。たとえば，高校生の異性交際が急激に早期化，活発化した 1990 年代半ばには，女子高校生による援助交

際が問題となり，その背景を探求しようとする研究がおこなわれている（菊島・松井・福富，1999，櫻庭・松井・福富・成田・上瀬・宇井・菊島，2001 など）。また，異性交際の活発化によって生じた問題として，若者の性感染症の予防に関する研究や（木原，2005，木原，2006，樋口・中村，2010 など），望まない妊娠・妊娠中絶に関する研究（佐藤，2005，安田・荒川・髙田・木戸・サトウ，2010）が行われている。

(2) 異性交際から疎外された若者の問題

しかし，最近の異性交際の遅延化・未経験化により，異性との交際や性行動，結婚といった異性交際をしない，またはできない「異性交際から疎外された若者」が増加している。近年，これらの異性交際から疎外された若者が様々な問題を抱えていることが指摘されている。

①異性交際を持とうとしない若者の問題

まず，若者が異性交際を持とうとしないことが問題として指摘されている。未婚の若者のなかで「とくに異性との交際を望んでいない」者の割合が，男性で 28.0%，女性で 23.6%もいることが明らかになっている（国立社会保障・人口問題研究所，2012）。また，交際相手を持たない 20 代・30 代男女が恋人を欲しいと思わない理由として，恋愛が面倒という回答が，男性では 52.6％と 2 番目に多く，女性では 60.1%と最も多かった（内閣府政策統括官，2011）。本来，思春期，青年期には，異性交際に関心を持つことは生物学的にも，社会文化的にも当然のことであり，青年期，成人初期の異性交際を基にして，新たな家族を形成していくと考えられてきた。異性交際を持とうとしない若者が増えているのはなぜのか，そのような若者にはどのような特徴があるのかが，問題とされている。

②異性交際がない悩み

また，異性交際がないことが悩みにつながるという指摘もある。「恋人ができない悩み」や「性交経験がない悩み」である。たとえば，2008 年 6 月に起こった「秋葉原通り魔事件」では，容疑者がインターネット上に「彼女がいない，ただこの一点で人生崩壊」といったように恋人ができない悩みや性交経験がない悩みを多数書き込んでおり，異性交際がないことが深刻な悩みであることが指摘されている （本田・柳下，2008）。また，渡部（2007）は，「30 歳でいまだ童貞です。世間の風潮に影響されてしまい，周囲にバレたらどうしよう，バカにされないだろうかといろいろ思いこんでしまい，ビクビクしながら生きています。」という言説を紹介し，ある程度の年齢を超えて性交経験がないために悩む若者の存在を指摘している。心理学の調査においても，大学生の 48.0%（男性 50.0％，女性 46.3％）が「恋人が欲しいのにできない」

という経験をしていることが示されており（高比良，1998），多くの若者がこの悩みを抱えているといえる。このように，異性交際から疎外された若者が，異性交際がないことで悩んだり，不安を感じていることが問題として指摘されているのである。

③未婚化とのつながり

異性交際から疎外された若者の増加が，未婚化とつながっているという指摘がある。国立社会保障・人口問題研究所（2012）の調査によると，結婚できない理由として，「適当な相手にめぐりあわない」ことを挙げる者の割合が増加している。また，厚生労働白書においては，「異性との交際は結婚相手の候補者を得る前提となっている」が，「結婚相手の候補となりうる交際相手がいる若者は限定的である」と述べられている（平成 25 年度厚生労働白書）。すなわち，若者が異性交際をしない，できないことで，未婚化につながり，さらには少子化の要因になっている可能性が指摘されているのである。

4．異性交際から疎外された若者に関する心理学研究

以上のように，異性交際から疎外された若者が増加し，それらの若者に関する問題が注目されるようになってきた。しかし，異性交際から疎外された若者の問題は，心理学の研究においてほとんど取りあげられてこなかった。最近になって，異性交際から疎外された若者に関する心理学研究が少しずつ行われるようになってきた。それらの研究は，(a)異性交際から疎外された若者の特徴を明らかにしようとする研究，(b)異性交際から疎外された若者に対する認識に関する研究，(c)異性交際から疎外された若者の精神的健康に関する研究，(d)標準的な異性交際経験の規範意識に関する研究の 4 つに分類することができる。

(1) 異性交際から疎外された若者の特徴

1 つ目は，異性交際から疎外された若者の特徴を明らかにしようとする研究である。先述のように，若者の異性交際の不活発化が指摘され，20 代 30 代の未婚者のおよそ 4 人に 1 人が異性との交際を望んでいないことが明らかになっている。高坂（2011）は，そのような恋人を欲しいと思わない青年の心理的特徴を，自我発達や精神的健康，個人主義との関連から検討している。その結果，恋人を欲しいと思わない青年は，恋人がいる青年や恋人を欲しいと思っている青年に比べて，　本来の自分自身と他者からみられている自分との一致感が低く，また，恋人がいる青年に比べて，自己の不変性および時間的連続性の感覚が低かった。さらに，恋人を欲しいと思わない青年は，恋人がいる青年や恋人を欲しいと思っている青年に比べて，自分の考えを最善であると考え，他者からの意見を受け入れない傾向があった。すなわち，異性交際を望まない若者は，少なくとも青年期のある時点においては，自我発達が相対的に低く，個人

主義的であることが示唆される。また，高坂（2011）は，恋人を欲しがらない理由を調べている。その結果，恋人を欲しがらない理由として，現状に満足して恋人が加わることを望まない「現状維持の希求」，恋愛や実際の異性との交際に対する「否定的イメージ」，異性との交際による物理的・時間的・経済的・心理的リスクを回避しようとする「リスク回避」，自分のやりたいことや趣味，生活リズムを優先する「自己の志向優先」，異性に対する不信感や相手との理解の限界を感じている「親密な関係構築への障害」，恋愛に必要な要素が整っていないと考える「恋愛準備性の低さ」，以前の恋愛による傷つきや交際による傷つき回避を表す「傷つきの抑制」，恋愛や恋人の意味や自身の今後がわからない「恋愛指針のなさ」，および「その他」の 9 つに分類し，恋人を欲しいと思わない理由は多様であることを明らかにしている。このことから，異性交際から疎外された若者にも，様々なタイプが存在することがうかがえる。

(2) 異性交際から疎外された若者に対する認識

2 つ目として，異性交際から疎外された若者が，社会からどのように認識されているかに関する研究がみられる。社会学からの研究ではあるが，渋谷（2003）は雑誌の言説分析から，「一定年齢以上の童貞にたいする，精神的欠陥やゆがんだパーソナリティを疑う思考の枠組みというものが，童貞言説上に存在」し，童貞は，「コミュニケーション恐怖症」であるとか，「恥ずかしがり屋」といったように記述されることを明らかにしている。すなわち，性交経験の有無が，人格特性と結びつけられているというのである。

心理学の立場からの研究として，若尾は，大学生を対象にした一連の調査を通して，実際に異性交際から疎外された若者に対してネガティブな特性が帰属される傾向にあることを明らかにしている。若尾（2003）は，恋人との交際の有無の情報が人物のイメージにどのように影響するかを，「恋人がいる人は__」「恋人がいない人は__」で始まる文章を完成してもらうこと調査している。その結果，恋人がいる人には「外交的・明るい」「やさしい」といったポジティブな特性が，恋人がいない人には「内向的」「性格悪い」といったネガティブな特性がイメージされる傾向にあった。また，若尾（2008, 2013）は，SD 法尺度により，「性交経験がある人」と「性交経験がない人」のイメージを調査し，「性交経験がない人」は，「性交経験がある人」に比べて，対人能力や動機づけが低く，未熟で不安定であるが，純粋でまじめ，誠実であるとイメージされることを明らかにしている。さらに「恋愛経験のある人」と「恋愛経験のない人」のイメージの比較においても，同様の結果がみられている（若尾, 2004）。このように，異性交際経験は人物評価と深く関わっており，異性交際から疎外された若者は偏見やネガティブなステレオタイプが向けられるといえる。

しかし，異性交際未経験者に対するイメージは，国や文化によって異なっており，

アメリカ人サンプルの研究においては異なる結果がみられている。たとえば，性的経験が多い人や中程度の人に比べて，性的経験がない人の方が恋人および配偶者としての魅力が高いことが明らかになっている（Sprecher，Regan，Mckenney，Maxwell，& Wazienski，1997）。また，大学生においては，性交経験人数が多い人物ほど，「価値」（信用や礼儀正しさ，恋人や配偶者としてのポジティブさ），「人気」，「知性」でネガティブな評価がされることが示されている（Marks & Fraley, 2005）。

（3）異性交際から疎外された若者の精神的健康

3 つ目として，異性交際から疎外された若者の精神的健康に注目した研究もみられる。異性交際から疎外された若者は，そのことで悩んだり，不安や焦りを感じていることが指摘されている（本田・柳下，2008，渡部，2007）。この問題に対して，若尾ら（若尾，2008，若尾・天野，2012）は，性交経験のない若者の悩みの背景として，「性交経験のない人」に向けられるネガティブな人物イメージに注目して，大学生を対象とした調査を行っている。性交経験のない若者が「性交経験のない人」を対人能力・動機づけが低いとイメージするほど，自尊心が低く，抑うつが高いことを示している。つまり，「性交経験のない人」に対する偏見やステレオタイプを，性交経験のない若者自身が持ってしまうことで，悩みにつながることが示唆されている。

（4）標準的な異性交際経験に関する規範意識

4 つ目に，異性交際から疎外された若者の問題を生じさせる背景として，異性交際を経験する適切なタイミングや年齢相応の経験に関する規範意識に注目した研究がみられる。若者の異性交際の早期化や遅延化が生じたが，早すぎる経験や遅くまで未経験であることは許容されていないようである。たとえば，中学生を対象とした調査では，中学生の性行為を過半数が容認していない（木原，2006）。一方で，渋谷（2003）によると，1980 年代から男性の初交年齢を規定する「童貞喪失年齢の規範化」の言説がみられており，一定の年齢を過ぎて性交未経験であることにネガティブな評価がなされている。

大学生を対象とした調査でも，異性交際を経験する適切なタイミングに関する意識が共有されていることが明らかになっている。若尾・天野（2007a）は，大学生を対象にして，初めての性交をするのに望ましい年齢について，その年齢から経験するのが望ましいという年齢（下限年齢）と，その年齢までに経験するのが望ましいという年齢（上限年齢）をたずねている。その結果，下限年齢については男女どちらに対してもおよそ 90％が 15 歳から 18 歳の間の年齢を回答しており，上限年齢については 18 歳から 20 歳と回答した者が，男性に対してはおよそ 70％，女性に対してはおよそ 60％であり，性交を経験するのに望ましい年齢が，特定の年齢範囲に集中する傾向が

あった。また，20 歳くらいになったら異性交際を経験していて当然という意識が共有されており（若尾・勝谷・天野，2006），異性交際をしている者の割合を実際よりも高く見積もる傾向もみられる。たとえば，若尾（2003）は，20 歳くらいの若者を対象に，同年代で恋人がいる人の割合を推測させたところ，実際にはこの年齢において恋人がいるのは 3 割程度であるが，推測の平均はおよそ 60％であり，ほとんどの回答者が実際よりも高い割合であると推測することを明らかにしている。若尾（2003）は，このような現象を恋愛普及幻想と名づけ，若者の恋愛行動に影響を与える可能性を指摘している。さらに，年齢相応の経験に関する意識も共有されていることが示されている。若尾・天野（2007b，2008）は，大学生を対象とした調査で，20 歳時点において異性との恋人としての交際や性交経験がどの程度あることが望ましいと考えられているかを調べている。恋人としての交際については，およそ 90%の人が 20 歳で 2 人以上との交際経験があることが望ましいと考えており，半数以上が 3 人以上と考えていた。性交経験については，2 人以上が望ましいと考えている人が，男性を想定した場合は 73.2%，女性を想定した場合は 63.7%であった。すなわち，20 歳くらいまでに異性交際経験があるだけでなく，複数の相手と経験があることが望ましいと考えられているのである。このように，異性交際を経験するのに相応しい年齢の意識や，年齢相応の経験に関する意識が，広く共有されており，そのことが異性交際から疎外された若者の問題につながっている可能性がある。

5．異性交際から疎外された若者に関する研究の新たな方向性

(1) 心理学における異性交際の位置づけ

以上のように，心理学においても異性交際から疎外された若者に関する研究が行われているが，その数は極めて少ないのが現状である。その理由として，心理学における異性交際の研究の位置づけ，異性交際の価値づけが影響していると考えられる。心理学において異性交際，すなわち恋愛は，主に社会心理学の対人関係に関する研究の枠組みで行われることが多かった。心理学，特に社会心理学の研究は，社会問題よりも普遍的な真理の探求に関心を示す傾向がある。また異性交際から疎外された若者の問題は，近年増えているとはいえ，全体ではまだ少数派であり，社会問題としてもそこまで大きくないため，研究の俎上に上ってこなかったのではないだろうか。さらに，そもそも心理学において，恋愛は研究として軽視される傾向があったため，研究自体が少ないことも理由として考えられる。

また，心理学の研究が，現代社会の恋愛の価値づけにとらわれているのではないかと考えられる。人間の発達という観点からみると，異性交際の経験は，青年期から成人初期の発達課題とみなされてきた。Erikson（1973）は，初期成人期の心理社会的危機として「親密性 対 孤立」を挙げており，この時期に異性との性愛も含めた愛情

関係を作り上げていくことが課題となるとしている。また，Havighurst（1958）は，青年期の発達課題の１つとして，「同年齢の男女としての洗練された新しい交際を学ぶこと」を含めている。最近では，新井・森下・岡部・有元（2004）は，男性において初交経験は青年期の発達課題の１つとなっていると述べている。つまり，青年期に異性交際を経験し，それを基に結婚し，新たな家族を形成していくというコースが標準的なモデルとして想定されていた。すなわち，これまでの研究は，ある程度の年齢になったら異性交際をするのが当たり前という発達モデルに基づいて，異性交際の問題を捉えてきたのではないだろうか。そのため，異性交際から疎外された若者は，標準的な発達から逸脱した存在としか捉えられてこなかったと考えられる。

(2) 異性交際のライフコースの多様化と自由な異性交際期間の出現

しかし，現代の若者の異性交際は，ある程度の年齢になったら恋愛をして，結婚するという従来の標準的なライフコースのあり方だけでなく，そもそも異性交際をしない，異性交際はするが結婚はしないなど様々なパターンが出現してきており，その時期も多様化しているようである。さらに，以前の若者にはみられなかった，人生のなかでの長期にわたる「自由な異性交際期間」が出現してきている。

1980 年代以前の若者は，1990 年代以降の若者に比べて，異性交際を開始する年齢は遅かったにも関わらず，結婚をする年齢は早かった。また，結婚に関しては適齢期が存在し，特に女性においては結婚年齢が 25 歳前後に集中する傾向があった。さらに，見合い結婚も少なからずあり，1980 年代前半においては 4 組に 1 組が見合い結婚であった。すなわち，1980 年代以前の若者は，結婚以前に異性交際をする時期は短く，異性交際を経験しないまま結婚をする者も少なくなかった。また，未婚率は低く，ある程度の年齢になるとほとんど全員が結婚していた。したがって，1980 年代以前の若者のライフコースは画一化されており，生涯のなかで恋愛という形で自由な異性交際が可能な期間はわずか数年しかなかったといえる。

1990 年代以降には，異性交際が早期化し，早い年齢段階から異性交際を開始する者が増加した。一方で，晩婚化が進み，平均初婚年齢は，1980 年代には男性で 28 歳，女性で 25 歳程度であったのが，2011 年には男性で 30.7 歳，女性で 29.0 歳にまで上がっている。高校生で異性交際を開始し，30 歳で結婚するという平均的な異性交際のあり方を想定すると，およそ 15 年に渡る異性交際期間がある。さらに，早期に活発に経験するものがいる一方で，30 代になっても未経験のものも少なからずいる。また，未婚率も上昇しており，30 代前半の男性の半数，女性の 3 分の 1 が未婚である。このことから，現代の若者のライフコースにおいては，長期にわたる自由な異性交際期間が出現してきており，そのパターンも早期に経験する者から遅くまで経験しない者まで，また多くの経験をする者から全く経験をしない者まで，異性交際経験の

タイミングも程度も様々であり，多様化してきているといえる。

(3) 異性交際のライフコースの視点の必要性

このように青年期から成人初期にかけて長期にわたる自由な異性交際期間が存在すること，また異性交際のライフコースが多様化していることは，心理学の研究においてはあまり考慮に入れられてこなかった。そもそも，ライフコース研究においては，異性交際は結婚に至る前提として，家族形成のライフコースのなかに組み込まれ，ほとんどとりあげられてこなかったように思われる。

しかし，人の生涯のなかで 15 年にもおよぶ自由な異性交際期間があり，異性交際の価値づけが非常に高くなり，異性交際の有無やタイミング，程度が個人の生活に大きな影響を及ぼしている。したがって，異性交際をライフコースのなかの重要なライフイベントの一つとして位置づけていく必要があろう。また，発達心理学においては，１つの普遍的な発達を想定する「単線型」の発達観から，発達を相対的なものとみなす「複線型」の発達観に変わったと言われて久しい（田島，1989）。家族形成については，単親や子どものいない家族，一人暮らしの増加など多様性について言及されることが多くなっている。異性交際についても，自由な異性交際期間のなかでの多様なライフコースパターンを想定し，異性交際経験の開始が遅い，あるいは異性交際を経験しないというパターンを考えていく必要がある。

(4) 異性交際のライフコース研究の方向性

①異性交際のライフコースの軌跡

異性交際のライフコース研究の方向性の一つとして，異性交際のライフコースの軌跡を捉え，それがその個人にどのように影響するのかに注目する研究が考えられる。異性交際から疎外された若者が，その後の人生において，どのような軌跡を辿るのか，あるいは異性交際から疎外された経験が，後にどのような影響を及ぼすのであろうか。たとえば，恋人をほしいと思わない若者は，青年期においては自我発達の程度が低いことが示されている（高坂，2011）。異性交際から疎外されたことが自我発達に影響するのか，あるいは自我発達が十分でないと異性交際に関心が向かないのか，発達的な視点で捉えていく必要がある。また，恋人がいる若者に比べて，恋人がいない若者は，精神的に不健康な傾向にあることが示されている（神園・黒川・坂田，1996，高坂，2011）。このような問題が，異性交際への関心が高まる青年期に特有の問題であるのか，あるいはその後の発達段階においても影響するものであるのか，興味深い問題である。さらに，異性交際の早期化や活発化がしばしば問題とされるが，異性交際を早期に開始することで，その後の人生にどのような差異をもたらすのか，十分にわかっていない。個人が，人生のなかでいつ異性交際を開始し，どのような異性交際経

験を経て，結婚や家族形成にいたるのかといった異性交際のライフコースパターンに注目し，それが個人の生活や精神的健康，発達にどのように影響するかを明らかにすることが重要である。たとえば，異性交際経歴が，結婚や家族形成にどのようにつながるのかは，未婚化，晩婚化の背景の理解につながるであろう。近年の未婚化に異性交際がどのように影響しているかについて，大きく 2 つの考え方があるように思われる。一つは，若者が異性交際を経験しないことが未婚につながるという考え方である。結婚しない理由として，「異性とうまくつきあえないから」を挙げる独身者が増加しており（国立社会保障・人口問題研究所，2012），結婚しないのは相手を見つけられないためであるとされる（平成 25 年度厚生労働白書）。一方で，異性交際が活発化したことが未婚化につながるという主張もある。現在の若者は自由な異性交際が許されており，結婚相手を自由に選ぶことができるため，相手を見つけられても，この人でいいのか，もっといい人が現れるかもしれないと，理想の相手を追い求めるため結婚できないという考え方である（たとえば，山田，1996）。異性交際経験パターンと結婚の関連に注目し，どのような異性交際を経験した人がどのようなタイミングで結婚や家族形成をする傾向にあるのか，異性交際を早期にあるいは晩期に開始することがどのように結婚や家族形成と関連するのか，あるいは結婚に至るまでの異性交際の多寡によって結婚や家族形成のあり方が異なるのか，調べていく必要があろう。

②異性交際の年齢的なタイミング

次に，異性交際の経験をライフイベントの一つと捉えて，その年齢的なタイミングに注目した研究が考えられる。ライフイベントの年齢的なタイミングは，ライフコース研究の課題の 1 つとされる（菅原，2005）。ライフイベントを経験すべきタイミングに関する意識は，年齢規範や年齢期待の概念で検討されてきた。年齢規範とは，年齢に相応しい行動に関する期待であり（Neugarten, Moore, & Lowe, 1965），ある文脈の中で，個人がある役割や状態にあるのに標準的な，または典型的な年齢について成員に広く共有された判断である（Lawrence, 1988）。異性交際の年齢規範として典型的なものに，結婚するのに相応しい年齢である結婚適齢期がある。現在では結婚年齢が分散化し，結婚適齢期は消滅しつつあると考えられているが（平成 25 年厚生労働白書），一方である程度の年齢までに結婚するつもりと考える独身者が増加している（国立社会保障・人口問題研究所，2012）。結婚以外の異性交際についても，経験する適切なタイミングがあることが示唆されている。先述のように，初めての性交を経験するのに理想とされる年齢が共有されており（若尾・天野，2007a），大学生くらいの年齢になったら，異性との交際をしていて当然とみなされている（若尾・勝谷・天野，2006）。人は年齢規範に基づいて将来展望を持つと考えられており（望月・中島・大根田，1992），異性交際の年齢規範は，異性交際のライフコースパターンに影

響していると考えられる。また，年齢規範は，相応しい年齢だけでなく，その年齢から逸脱した者にネガティブな結末が生じるという予期とが，集団の成員に共有されていることを指す（Neugarten, et al., 1965）。異性交際未経験の若者にネガティブな特性が帰属されるのは，異性交際の年齢規範からの逸脱者へのネガティブな結末であると考えることができる。異性交際から疎外された若者を，異性交際の年齢規範からの逸脱者と捉えることで，それらの若者に生じている問題を理解することができるであろう。

③異性交際のライフコースのコホート比較

最後に，コホートによる違いに注目した研究が考えられる。松井（2012）は，性行動研究・恋愛研究には時代性の考慮も必要であると述べている。たとえば，NHK 放送文化研究所（2004）によると，婚前交渉に関する態度を世代間で比較すると，同一コホートは 30 年経過した後も類似した回答をしていた。青年期に形成された態度が，30 年後にも変化していなかったのである。すなわち，異性交際に関する意識は，世代により異なっており，コホート現象であると考えられる。若者の異性交際は，ここ 20 年ほどの間に急激な変化をしており，出生コホートにより異性交際のライフコースの軌跡も大きく異なっている。とりわけ，1990 年代半ばから 2000 年代前半に高校時代を過ごしたコホートは，その前後のコホートに比べて性行動を早期に活発に経験している。木原（2006）は，1990 年代に若者の間に様々な問題が生じたことを「1990 年代症候群」と名づけ，このコホートの特殊性を指摘している。また，全体として異性交際が低調であった 1980 年代以前に高校時代を過ごした世代と，異性交際が二極化し異性交際を望まない者が増加した 2000 年代後半以降に高校時代を過ごした世代では，平均的な異性交際経験率は同程度であったとしても，その意識や異性交際のライフコースは，大きく異なっている。

ここでは，試験的に異性交際の開始年齢，活発化の程度，および社会状況から，高校時代を過ごした時代によって出生コホートを区分してみたい（Table1）。A のコホートは，1990 年代前半までに高校時代を過ごしており，異性交際の開始年齢は遅く，あまり活発でないコホートである。社会状況として，バブル景気で社会が右肩上がりの時代である。B のコホートは，異性交際の早期化，活発化が急激に進んだコホートである。この時期には，バブル経済が崩壊し，就職氷河期を迎えている。C のコホートは，異性交際が最も早期化，活発化したコホートである。この時期には，若者文化の発信源として女子高生が注目される，いわゆる女子高生ブームが起こり，援助交際などの若者の性の問題が社会問題となっている。D のコホートは，異性交際の早期化，活発化が徐々に沈静化していったコホートである。この時期には，若者の性の乱れが問題視され，いわゆる淫行条例やメディア規制など若者の性の乱れを抑止する政策が

なされている。E のコホートは，震災以降に高校時代を過ごしており，異性交際が遅延化・不活発化したコホートである。異性交際の開始時期や活発さについては，時期によって大きく異なるが，結婚については，一貫して後のコホートほど，晩婚化，未婚化が進行している。

Table1 異性交際の開始年齢および社会状況からの出生コホートの区分

	高校生の時期	出生時期	異性交際状況	結婚年齢	社会状況
A	1986-1991 年	1971-1975 年	開始年齢が遅く，不活発	晩婚化・未婚化傾向が進行	バブル景気
B	1991-1995 年	1976-1980 年	早期化が急速に進行		バブル崩壊
C	1996-2002 年	1981-1987 年	最早期化，最活発化		女子高生ブーム,援助交際問題
D	2003-2009 年	1988-1994 年	遅延化，不活発化傾向		淫行条例の施行，メディア規制
E	2009 年以降	1995 年以降	さらなる遅延化傾向		震災以降

この区分は便宜的なものであるが，異性交際状況と社会状況を加味してコホートを区分し比較をすることで，社会状況や時代背景によって異性交際の意識や行動がどのように規定されていくのか，またそれぞれのコホートにおいて，あるライフコースを辿ることが，その後の人生にどのような影響をもたらしているのか明らかにすることができる。本稿でとりあげた異性交際から疎外された若者についても，そのあり方や位置づけが出生コホートによってどのように異なるのか，彼らがおかれた社会状況や時代背景からとらえていくことができる。

6．最後に

若者の異性交際は，ここ 20 年ほどの間に大きく変化するとともに，多様化が進み，従来のモデルが必ずしも当てはまらなくなってきている。現代の若者の生涯には，平均して 10 数年間の自由な異性交際期間が存在し，この期間にどのように異性交際を経験するかは非常に多様化している。若者の異性交際を理解するには，発達的な視点，つまり異性交際のライフコースという視点から捉えていくことが有効であると考えられる。異性交際から疎外された若者を，多様なライフコースパターンの一つであると捉えることで，理解につながっていくであろう。

注） 現代社会では，恋愛と結婚は深く結びついており，結婚には恋愛が必要であると見なされるようになったと指摘されている（例えば，山田，2006）。若者の意識としても恋愛の到達点が結婚であるという考え方があることが示されており，松井（1990，2000）による恋愛の進展段階によると，恋愛の第 5 段階として，婚約が位置づけられている。

引用文献

赤川　学. (2002). 恋愛という文化／性欲という文化. 服藤早苗・吉野　晃・山田昌弘(編),シリーズ比較家族第 2 期 *恋愛と性愛* (pp.149-172). 東京：早稲田大学出版部.

新井周作・森下　覚・岡部大介・有元典文. (2004) 文化的なオブジェクトとしての「童貞」. *横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター紀要*, 4, 67-88.

Havighurst, R. J. (1958). *人間の発達と教育* (荘司雅子訳). 東京：牧書店. (Havighurst, R. J.(1953.) Human development and education. New York: Longmans Green.)

Erikson, E. H. (1973.) *自我同一性－アイデンティティとライフサイクル*. (小此木啓吾訳). 東京：誠信書房. (Erikson, E. H. (1959.) *Identity and the life cycle*. Psychological Ieesues Monograh, Vol. 1, No. 1. New York : International Universities Press.)

樋口匡貴・中村菜々子. (2010.) コンドーム購入および使用に関する行動の変容ステージと羞恥感情との関連. *心理学研究*, 81, 234-239.

本田　透. (2005) *電波男*. 東京：三才ブックス.

本田　透・柳下毅一郎. (2008.) 事件を起こしたこと以外，ほとんど僕と一緒なんです. 洋泉社ムック編集部（編），*アキバ通り魔事件をどう読むか!?* (pp.68-73). 東京：洋泉社.

神薗紀幸・黒川正流・坂田桐子. (1996.) 青年の恋愛関係と自己概念及び精神的健康の関連. *広島大学総合科学部紀要Ⅳ理系編*, 22 ,93-104.

木原正博. (2005.) *ＨＩＶ感染症の動向と予防モデルの開発・普及に関する社会疫学的研究*. 平成 16 (2004)年度厚生労働科学研究費補助金報告書.

木原雅子. (2006). *10 代の性行動と日本社会*. 京都：ミネルヴァ書房.

菊島充子・松井　豊・福富　護. (1999.) 『援助交際』に対する態度 : 雑誌や評論の分析と大学生の意識調査から. *東京学芸大学紀要第 1 部門教育科学*, 50, 47-54.

国立社会保障・人口問題研究所. (2012.) *平成 22 年わが国独身層の結婚観と家族観－第 14 回出生動向基本調査－*. 東京：厚生労働統計協会.

国立社会保障・人口問題研究所. (2013.) 人口統計資料集.
〈http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2013.asp?chap=0〉（2013年9月29日12時48分）

高坂康雅. (2011.) "恋人を欲しいと思わない青年"の心理的特徴の検討. *青年心理学研究*, 23, 147-158.

小谷野敦. (2000) 恋愛の超克. 東京：角川書店.

小谷野敦. (1999) もてない男-恋愛論を超えて. 東京：筑摩書房.

Lawrence, B. S. (1988.) New wrinkles in the theory of age: demography, norms, and performanceratings. *Academy of Management Journal*, 31, 309-337.

松井　豊. (1990.) 青年の恋愛行動の構造. *心理学評論*, 33, 355-370.

松井　豊. (2000.) 恋愛段階の再検討. *日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集*, 92-93.

松井　豊. (2012.) 日本心理学会第 76 回大会 WS「異性交際をしない・できない若者へのアプローチ」指定討論.

Marks, M. J. & Fraley, R. C. (2005.) The Sexual Double Standard: Fact or Fiction? *Sex Roles*, 52, 175-186.

望月葉子・中島史明・大根出充男. (1992.) 年齢規範の観点からみた青年の将来展望に関する研究－予期された標準的なライフサイクルと職業生活設計をめぐって－. *発達心理学研究*, 3, 81-89.

森岡正博. (2008.) *草食系男子の恋愛学*. 東京：メディアファクトリー .

内閣府政策統括官. (2011.) *結婚・家族形成に関する調査報告書*.
Neugarten, B. L., Moore, J. W., & Lowe, J. C. (1965.) Age norms, age constraints, and adult socialization. *The American Journal of Sociology,* 70, 710-717.
NHK 放送文化研究所. (2004.) *現代日本人の意識構造*. 東京：日本放送出版協会.
日本性教育協会. (2012.) *青少年の性行動　わが国の中学生・高校生・大学生に関する第 7 回調査報告*. 東京：日本性教育協会.
ORICON STYLE. (2006.) 発表！新成人の欲しいもの・かなえたい事ランキング！〈http://www.oricon.co.jp/news/ranking/8211/〉（2013 年 9 月 28 日 16 時 49 分）
櫻庭隆浩・松井　豊・福富　護・成田健一・上瀬由美子・宇井美代子・菊島充子. (2001.) 女子高校生における『援助交際』の背景要因, *教育心理学研究*, 49, 167-174.
佐藤郁夫. (2005.) 望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究. 平成 16(2004)年度厚生労働科学研究費補助金報告書.
渋谷知美. (2003.) *日本の童貞*, 東京：文藝春秋.
菅原ますみ. (2005.) ライフコース研究の新しいかたち. 遠藤利彦（編）, *発達心理学の新しいかたち* (pp.260-293). 東京：誠信書房.
Sprecher, S., Regan, P. C., McKenney, K. Maxwell, K., & Wazienski, R. (1997.) Preferred levelof sexual experience in a date or mate: The merger of two methodologies. *The Journal of Sex Research*, 34, 327-337.
田島信元. (1989.) ところかわれば人かわる-発達と文化. 田島信元（編）, *心理学キーワード*(pp.112-113). 東京：有斐閣.
高比良美詠子. (1998.) 対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の作成と妥当性の検討. *社会心理学研究*, 14, 12-24.
谷本奈穂. (2008.) *恋愛の社会学－「遊び」とロマンティック・ラブの変容－*. 東京：青弓社.
立脇洋介. (2010.) 流行歌は恋愛の理解に有効か？　若尾良徳・天野陽一・立脇洋介・谷口淳一・松井豊.　恋愛研究の新たな視点〜現代社会の恋愛への現象ベースのアプローチ〜　*日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集*.
東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会. (2005.) *2005年調査児童・生徒の性*. 東京：学校図書.
雲野加代子. (1996.) 漫画におけるジェンダーについての考察――少女漫画の恋愛至上主義. *大阪明浄女子短期大学紀要,* 10, 187-196.
若尾良徳. (2003.) 日本の若者にみられる 2 つの恋愛幻想－恋人がいる人の割合の誤った推測と、恋人がいる人へのポジティブなイメージ－. *東京都立大学心理学研究,* 13. 9-16.
若尾良徳. (2004.) 恋愛経験ステレオタイプの検討-日本の若者にみられる恋愛普及幻想と恋愛ポジティブ幻想（7）. *日本心理学会第 68 回大会発表論文集*.
若尾良徳. (2008.) 性交未経験者への偏見とその影響-大学生における性交経験者と未経験者の人物イメージの検討-. *思春期学*, 26, 154-166.
若尾良徳. (2013.) 大学生における性交経験者・未経験者に対する人物特性イメージの検討―イメージされた性別による差異の検討―. *浜松学院大学研究論集*, 9, 37-48.
若尾良徳・天野陽一. (2007a.) 大学生における初交年齢の意識－神奈川県の一私立大学を対象として－. *思春期学*, 25, 455-462.
若尾良徳・天野陽一. (2007b.) 20 歳時点での性交経験人数についての意識－神奈川県の一私立大学

生を対象として－. *思春期学*, 25, 176-181.
若尾良徳・天野陽一. (2008.) 20 歳時点での恋愛経験人数についての意識―神奈川県の一私立大学生を対象として―. *和洋女子大学紀要人文系編,* 48, 79-85.
若尾良徳・天野陽一. (2012.) 性交経験者・未経験者に対するイメージが大学生の精神的健康に及ぼす影響－性別によるパターンの違いの検討－. *思春期学,* 30, 155-168.
若尾良徳・勝谷紀子・天野陽一. (2004.) 女子大学生における恋愛に関する規範の検討－日本の若者にみられる恋愛普及幻想と恋愛ポジティブ幻想(6)－. *日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集*, 528-529.
渡部伸. (2007.) *中年童貞－少子化時代の恋愛格差－*. 東京：扶桑社.
山田昌弘. (1996.) *結婚の社会学：未婚化・晩婚化はつづくのか*. 東京：丸善.
安田裕子・荒川　歩・髙田沙織・木戸彩恵・サトウタツヤ. (2008.) 未婚の若年女性の中絶経験 現実的制約と関係性の中で変化する, 多様な径路に着目して. *質的心理学研究*, 7, 181-203.